

平成 30 年 5 月 17 日現在

機関番号：33937

研究種目：若手研究(B)

研究期間：2015～2017

課題番号：15K17411

研究課題名（和文）子どもの思いや気づきを生かす生活科の授業づくり 新教科創設期の実践に学ぶ

研究課題名（英文）Creating Classes for Life Environment Studies that use Children's Thoughts and Awareness : Learning from practice during the new subject creation period

研究代表者

白井 克尚 (Shirai, Katsuhisa)

愛知東邦大学・教育学部・助教

研究者番号：60643400

交付決定額（研究期間全体）：（直接経費） 1,500,000円

研究成果の概要（和文）：本研究の成果は、新教科創設期において全国の研究推進校を代表する愛知県宝飯郡御津町立御津南部小学校の生活科の授業づくりを対象にして、その実態を明らかにしたことである。研究成果の概要は、以下の三点である。第一に、育てたい子どもの姿をふまえた自発的な研究主題に基づき、「生活科の授業づくりのための四つのポイント」を意識した生活科の単元構想を行っていた点である。第二に、既存の教科の枠を超えて、子どもの実態に応じた生活科の単元計画の開発や修正を行っていた点である。第三に、生活科の単元全体で子どもの思いや気づきを生かすための表現活動を構成し、評価の手立てを工夫しながら研究実践に取り組んでいたことである。

研究成果の概要（英文）：This research clarified the creation of lessons for life environment studies in the Mito Nanbu elementary school in Mito, Hoi District, Aichi Prefecture, representing the promotion of research schools nationwide during their establishment as a new subject. This research had three major approaches. First, unit development for life environment studies classes was planned with full awareness of “the four points for creating lessons of life environment studies classes,” based on a spontaneous research theme. Second, unit plans for life environment studies lessons were revised and improved based on children’s educational situations regardless of the framework of existing subjects. Third, expression activities in class were emphasized to make use of children’s ideas and things they noticed.

研究分野：生活科・総合的学習、社会科教育、教育実践史

キーワード：新教科創設期 生活科の授業づくり 愛知県宝飯郡御津町立御津南部小学校 校内授業研究会 生活科のカリキュラム開発

1. 研究開始当初の背景

1998(平成20)年度の学習指導要領改訂の際には、生活科の授業をめぐって、学習活動が体験するだけに終わってしまい、そこで得られた「気付き」などを質的に高める指導が十分でない、表現の出来栄に目が行きがちで、表現することによって活動や体験をふりかえるといった指導が十分行われていない等の課題についての指摘がなされた。そうしたときに、生活科が本当に必要とされた時期に立ち返り、教師たちによる真摯な取り組みに学ぶ必要があると考えた。

生活科は、1989(平成元)年の学習指導要領の改訂によって誕生した新教科である。文部省は、その前年の1988(昭和63)年度より、生活科の円滑な実施に資するために、全国の各都道府県に51校の「生活科に関する研究推進校」を設け、生活科の新教科としての創設を推進していた。それらの研究推進校では、生活科の授業に関する研究と実践が取り組まれ、1992(平成4)年度からの全国の小学校での全面実施に大きな意義と役割を果たしていた。

愛知県下で唯一の生活科に関する研究推進校であった愛知県宝飯郡御津町立(現豊川市立)御津南部小学校(以下、御津南部小)は、研究推進校の2年目の方向と課題を明確にするために設けられた1989(平成元)年度の連絡協議会において、研究発表校の2校のうちの1校として選ばれたように、全国の研究推進校を代表的する学校であった。また、文部省の初代生活科教科調査官であった中野重人(1990)も、御津南部小学校の実践的研究について、「常に研究推進校の先端にあった」といい、「全国からも注目されるところとなった」と報告している。その実践記録は、『子どもの思いや気づきを生かす楽しい生活科の授業』(1990,黎明書房)として刊行され、全国での生活科授業

の全面実施にも大きな影響を与えたとされる。

これまでの生活科の新教科創設期に関して注目される先行研究としては、吉富・田村(2014)による研究がある。吉富・田村は、平成元年度の学習指導要領改訂の検討段階に着目して、生活科の新教科としての形成過程について詳細な調査研究を行っている。しかし、新教科の創設を推進した研究推進校による生活科の授業づくりの実態については、十分論じられていない。そのことが明らかにされない限り、生活科授業の改善や工夫のための基礎的な視点は提供されないと考えた。そうした問題意識に基づき、特に子どもの思いや気づきに配慮して、生活科の授業づくりに取り組んでいた御津南部小の実践に学ぶことの必要性を痛感するようになった。また、研究推進校としての実践に携わった関係者の高齢化や、現存する資料が失われていくことを問題視し、新教科創設期における御津南部小の教師たちによる試行錯誤のなかで取り組まれていた生活科の授業づくりの意義を、これからの世代に伝えていく必要性を強く感じるようになった。

2. 研究の目的

本研究では、生活科の新教科創設期において全国の研究推進校を代表する御津南部小における子どもの思いや気づきを生かす生活科の授業づくりを対象にして、実践記録集、研究発表資料、研究紀要等の資料を収集・検討し、関係者へのインタビュー調査等を通じて、その実態を解明し、現在において学ぶべき視点を探ることを目的とする。このことにより、今後の生活科の授業実践をよりよく計画し展開していくために、新教科創設期という生活科が本当に必要とされた時期に立ち返って、子どもの気づきを質的に高めるための手立てや、学習活動

をふりかえる際の工夫について、具体的な手がかりが得られると考えた。

3. 研究の方法

本研究は、以下の方法によって遂行する。新教科創設期における御津南部小学校の実践に関わる資料を収集する。現存する職員会議録や研究発表資料、研究紀要、実践記録集等を収集し、生活科の授業づくりの視点から、その整理と分類を行う。また、関係者からの調査への協力と了解を得て、質問紙調査用紙の作成や、インタビュー調査の準備を行い、質問紙調査やインタビュー調査を実施し、その記録の整理と分析的検討を行う。さらに、分析結果をふまえ、御津南部小学校の生活科の授業づくりの実態を論文などによって公開し、広く意見を求めると共に研究課題を批判的に検証し、実証的に解明する。

4. 研究成果

本研究の成果は、新教科創設期において全国の研究推進校を代表する御津南部小の生活科授業づくりを対象にして、その実態を明らかにすることができた。

研究成果の概要は、以下の通りである。

まず、新教科創設期における御津南部小での生活科のカリキュラム開発を代表する事例として、第1学年単元「みとやまで あきをさがそう」の作成過程を中心に、その特質について検討した。当時の御津南部小での第1学年単元「みとやまで あきをさがそう」における生活科のカリキュラム開発の特質は、以下の三点にまとめることができる。

第一に、御津南部小の生活科カリキュラムの開発研究が、研究主題「自ら考え進んで行動できる子どもを育てる授業をめざして」に基づき、全校体制で組織的、計画的に取り組まれていたことである。

第二に、御津南部小の生活科のカリキュラム編成が、教科の枠を超えながら地域や子どもの実態をふまえて、自発的な課題をもって取り組まれていたことである。

第三に、御津南部小の生活科のカリキュラムにおける単元構成と見直し、年次ごとに学級の子どもの実態に応じて弾力的に行われ、子どもの興味に合わせた手立てや評価の観点などがより具体化されていったことである。

次に、新教科創設期における御津南部小での生活科の授業づくりに関して、御津南部小の三年間の開発研究を事例として、第1学年単元「かぞくをしょうかいしよう」の研究実践を中心に、その実態を明らかにすることができた。当時の御津南部小での第1学年単元「かぞくをしょうかいしよう」における生活科の授業づくりの特質は、以下の三点にまとめることができる。

第一に、育てたい子どもの姿をふまえた自発的な研究主題に基づき、「生活科の授業づくりのための四つのポイント」を意識して生活科の単元構想を行っていた点である。

第二に、既存の教科の枠を超えて、子どもたちの実態に応じた生活科の単元構成の修正や改善を行っていた点である。

第三に、生活科の単元全体で子どもの思いや気づきを生かすための表現活動を重視し、評価の手立てを工夫しながら研究実践に取り組んでいたことである。

以上のように、生活科の授業づくりにおいて、子どもの気づきを質的に高めるための手立てや、学習活動をふりかえる際の工夫といった子どもの思いや気づきを生かすための普遍的な視点について学ぶことができたと考える。

5. 主な発表論文等

(研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線)

〔雑誌論文〕(計 2件)

白井克尚「新教科創設期における生活科のカリキュラム開発に関する研究 愛知県宝飯郡御津町立御津南部小学校の『単元指導計画』の作成過程を中心に」『東邦学誌』愛知東邦大学,第46巻第2号,査読無,2017年12月,pp.27-47

白井克尚「新教科創設期における生活科の授業づくりに関する研究 愛知県宝飯郡御津町立御津南部小学校の開発研究を事例として」『日本教科教育学会誌』日本教科教育学会,第40巻4号,査読有,2018年3月,pp.1-11

〔学会発表〕(計 5件)

白井克尚「新教科創設期における生活科授業づくり 研究推進校の校内授業研究会を事例として」日本生活科・総合的学習教育学会 第25回全国大会(宮城学院女子大学,仙台市) 2016年6月12日『日本生活科・総合的学習教育学会 第25回全国大会 宮城大会』,p.191

白井克尚「新教科創設期における生活科に関する研究推進校の授業づくりに関する一考察-愛知県宝飯郡御津町立御津南部小学校の取り組みを事例として」日本学校教育学会 第31回研究大会(名古屋市立大学,名古屋市) 2016年8月6日『日本学校教育学会 第31回研究大会要旨集録』,pp.46~47

白井克尚「新教科創設期(1989-1991)における生活科の授業づくり 愛知県宝飯郡御津町立御津南部小学校の取り組みに焦点を当てて」ほのく

に生活科・総合的学習研究会 2017 (Book Café Nido,豊川市) 2017年2月13日 ポスター

白井克尚・原田三朗「小学校教師における生活科授業像の形成過程とその要因 新教科創設期に焦点を当てたライフヒストリー的アプローチを通して」日本生活科・総合的学習教育学会 第26回全国大会(豊島区立西池袋中学校,東京都) 2017年6月17日『日本生活科・総合的学習教育学会 第26回全国大会 東京大会』,p.116

Katsuhisa Shirai:Research on Lesson Study for the Curriculum Development of Life Environment Studies During Establishment as a New Subject in Japan, World Association of Lesson Studies(WALS) International Conference 2017, 26 November 2017, Nagoya University, Abstract Number:20110

〔図書〕(計 1件)

白井克尚『子どもの思いや気づきを生かす生活科の授業づくり - 新教科創設期の実践に学ぶ -』(平成27(2015)年度~平成29(2017)年度 JSPS 科研費 若手研究(B) 課題番号 15K17411 研究成果報告書)三恵社,2018年3月,全70頁

6. 研究組織

(1)研究代表者

白井 克尚 (SHIRAI, Katsuhisa)

愛知東邦大学・教育学部・助教

研究者番号:60643400